の言う第2の分岐点からMGGを離れる可能性(詳細は梶田(1986)参照)を地道に模索して行く必要があるように思われる。

ともあれ、本書がJackendoff (2002)と抱き合わせて読むことで現在の理論言語学の世界とそれを含む認知心理学の世界をも鳥瞰することができる理論言語学の大著であることに間違いはない。

引用文献


梶田 優 (1986)「チョムスキーからの三つの分岐点」『言語』15巻12号、96-104.

成田義光・長谷川存古共編『阪大英文学会叢書2
英語のテンス・アスペクト・モダリティ』


1. はじめに

テンス(tense)、アスペクト(aspect)、モダリティ(modality)という三つのカテゴリー(いわゆる、“TAM”)は、いずれも、述語によって述べられる事象に対する概念化主体の捉え方を表示するという共通性を持っている。本書は、この三つの分野に関する16編の論文から成る論文集である。これまで、“TAM”を総合的に論じた書物はほとんどない。それゆえ、本書の出版価値は極めて高いことができる。

「あとがき」(長谷川存古氏執筆)にあるように、本書は『阪大英文学会叢書』の英語学の分野の最初の巻であり、編者の一人、成田義光教授を中心として長年地道な活動をしてこられた「TAM研究会」のメンバーによる論考が中心となっているが、それ以外の阪大英文学会会員諸氏による論考も多数含まれている。
本書は、示唆に富む「あとがき」(成田義光氏執筆)に続いて、I. テンス、II. アス
ベクト、III. モダリティの3部構成となっている。いずれの論文も、多様な枠組み・言語観に基づいて、今日的な観点から著しく精緻でハイレベルな議論が展開されており、読み応えがある論文集となっている。

2. 本書の内容
はじめに、各論文の内容を簡潔に紹介しておきたい。まず、第1部「テンス」からはじめる。

「過去現在動詞の心理」（毛利信雄氏執筆）は、英語の法助動詞can, may, must, shall, oughtなどの意味変化を巡ることによって、これらの語の意味変化の相互関係を論じたものである。

「未来を表す英語表現——話者はどのように未来と係るのか——」（内田知子氏執筆）は、進行形の本質としての「志向性」を含む時間枠（著者の言う「活性枠」）に基づいて、様々な未来表現を論じたものである。モダリティによる未来表現においては、可能世界において進行形の活性枠が設定されているという主張が打ち出されている。

「「語り」と過去時制」（堀田知子氏執筆）は、過去時制に「語りの過去時制」というタイプがあることを指摘し、その特性を(individual)レベル述語の解釈に基づいて明らかにしている。すなわち、「語りの過去時制」では、その状態が変化したという解釈も、主体がもはや過去の存在であるという解釈も成り立たないが、それは、語り的言説であるためであると論じている。

「定形節補文の二つの時間解釈とDouble Access Reading」（梅原大輔氏執筆）は、名詞句と定形節の類似性に基づいて、定形節の時間解釈に関して、補文が自体が持つ時間と補文内部の制限が持つ時間という2つの点から考察したものである。すなわち、定形節の持つCP時点とTP時点を区別し、CP全体が持つ時間を考慮することが新しい洞察につながることを主張している。「英語補文時制の意味と形式の関係に関する一考察——複合グラウニングの観点から——」（田村幸治氏執筆）は、英語の補文時制の議論において主流を占めている意味論的アプローチでは多重埋め込みの過去時制を処理できないと述べ、それに代わるモデルとして「複合グラウニング」というモデルを提示し、伝達法則とのアナログを指摘している。

「英語の不定詞構文の時制について」（坂口真理氏執筆）は、英語の不定詞構文に相当する日本語の補文に関する観察（＝「コントロール構文の従属節の動詞は、時制の形態素を自由に選択することができない」）に基づいて、英語の不定詞構文の時制について考察したものである。著者は、英語において、非定形文の時制の解釈とその統語的性質が関係していると結論づけている。

「時間概念のカテゴリー化」（西川盛雄氏執筆）は、時制、相、モダリティのそれぞれの概念について概観したあと、基本的に時制が相とモダリティに先行して時間概念
をカテゴリー化することを述べ、さらに、ジェスワブ語、日本語、ポリネシア語、タガログ語などの時間概念の捉え方について説明し、最後に相の認知的階層性について考察を加えている。

次に、第II部「アスペクト」に移りたい。
「いわゆる「行為解説の進行形」の概念構造について」（長谷川有福氏執筆）は、「行為解説の進行形」に関して、基本的にLangackerの認知文法の枠組みに沿って、このタイプの進行形の特質を明かにするための枠組みを提出したものである。著者は、この進行形の「概念構造」の本質は、V₁（典型的には、単純過去形）とV₂（典型的には、過去進行形）の（具体的次元と抽象的次元という）「次元の相違」に求められることを明らかにしている。

「“Hot News”の完了形」（渋本康宏氏執筆）は、このタイプの完了形に関する先行研究を丁寧に整理したあと、この完了形の実体を実際の用例に基づいて考察し、この用法は、完了形の持つ「新しい局面の導入」という性質を的確に踏まえた用法として定着し、今や定形表現化していることを論じている。

「“ている”と現在完了のパズル——SRE理論の認知言語学的再構築をめざして——」（溝本秀樹氏執筆）は、日本語の「ている」形の「完了」用法に注目し、他言語、特に英語の完了形との比較を「現在完了形のパズル」という観点から論じるものである。「現在完了形のパズル」とは、「英語の現在完了形が明確な過去を表す副詞表現と共起できない」という制約であるが、著者はこの問題を認知言語学の立場から説明している。

「知覚名詞とその補文について——視覚を表す名詞を中心に——」（甲斐雅之氏執筆）は、知覚を表す名詞（たとえば、sight, soundなど）を取りあげ、それらの知覚名詞が取る現在分詞補文との関係についてアスペクトの観点から考察したものである。著者は、知覚名詞の現在分詞補文が知覚動詞の現在分詞補文とは異なる性質を持ち、アスペクト的には曖昧となり、主要部の知覚名詞の特性によって補文の解釈が決定されることが明らかにしている。

「英語前置詞に見られる空間から時間へのメタファー」（竹本光子氏執筆）は、英語の前置詞について、空間から時間へのメタファーという視点から論じたものである。前置詞の空間から時間へのメタファー的転用として、時間とアスペクト（たとえば、起動、完了、継続など）の用例について論じ、単純な文法化の論理では捉えきれない前置詞の多様な機能を分析している。

「アスペクトの統語構造」（松本マスミ氏執筆）は、これまで主に意味論で扱われてきたアスペクトについて統語構造に基づいて説明する可能性を探ったものである。中間構文、疑似受動文、同族目的語構文、非特定目的語除構文、習慣文などのアスペクト特性に対して、具体的な統語構造（すなわち、アスペクト句（ASPP））を用いた分析が提示されている。
最後に、第Ⅲ部「モダリティ」を見てみよう。
「法助動詞の論理的意味・心理的意味・対人関係的意味」(柏本吉章氏執筆) は、法助動詞は「義務論理的意味」(deontic meaning) と認識論的意味(epistemic meaning) という意味の対立を有するが、実際の発話場面で使用される場合には、その論理の体系を超えて、心理的、対人的モダリティの表現として、さまざまな興味深い性質を示すことを明らかにしたものである。

「推理小説とモダリティ」(稲本昭子氏執筆) は、文は命題とモダリティから成ると想定し、モダリティ部分の表現がどのような形で推理小説に取り入れられているか、語り手による情報操作とモダリティとはどのような関係にあるのかを、犯人が語り手である推理小説として有名な Agatha Christie の The Murder of Roger Ackroyd を題材として論じたものである。

「Happen to 不定詞のモダリティ」(田岡育恵氏執筆) は、モダリティは「話者の心的態度」を表すが、事態の「偶然性」を認識することも、聞き手にその事態を伝えるとときの話し手の配慮も心的態度であると想定したうえで、「偶然性」を表す happen to 不定詞の興味深い例をモダリティの観点から考察を加えている。

3. 議論
　本節では、上で紹介した 16 編の論文のうち、3 編に関して紙幅の許す範囲内で若干の議論を加えてみたい。

3.1. テンスについて

(1) John decided a week ago [that in ten days at breakfast he would say to his mother [that they were having their last meal together]]. (Abusch 1988: 2, 田村 2005: 67)
　一つは、最も深く埋め込まれた that 節において、母親と最後の食事を取っているという事象の時間が一つ上位の節の動詞 (=say) の時間と一致している場合 (=同時読み) であり、もう一つは、「食事の時間」が「言う時間」よりも以前である場合 (=ズレ読み) である。
　田村論文で提唱されている「複合グラウンティング」モデルによると、「複合され る順序などには関わりなく、最終的な補文グラウンティング関係が形成されるまで に、過去の関係が話者により経験されれば、過去時制形式が具現化してもよい」(田
村 2005: 77) ということから、(1) の両方の読みのいずれにおいても、最も深く埋め込まれた節の時制は最終的に過去時制として具現化し得ることになる。

評者には、(1)のような解釈には、節と節の支配関係や「代理基盤」(surrogates ground)に基づく「視点の移動」(Langacker 1991: 253; 澤田 1993: 289ff., 2006: 30)が重要な役割を果たしているようにと思われる。たとえば、以下の例(クリステイ『ロジャー・アクロイドの殺害』の27章から)を解釈してみよう。この例の最深部の節においては、過去時制ではなく、過去完了形が生起している。

(2) I wish [I could have known beforehand [that Flora was going to say [she'd seen her uncle alive at a quarter to ten]]]. That puzzled me more than I can say.

(A. Christie, The Murder of Roger Ackroyd)（斜体評者）

(2) では、以下のような段階的な解釈プロセスが考えられる。まず最初に、(i) 主節動詞の wish の目的節の中の could have known (＝「あの時、前もって」わがしていたらなあ) を、can know の仮定法過去完了形に相当する形と捉える、次に、(ii) know の目的節の中の、(could have known のために) 後方転位された過去時制形 was going to say を(視点移動によって) “is going to say” (= 未来) と解釈する、最後に、(iii) say の目的節の中の、(was going to say のために) 後方転位された過去完了形 had seen を(視点移動によって) 過去時制形 “saw” (= 未来における過去) と解釈する。

(2) の最深部の節において、過去時制形 saw ではなく、過去完了形 had seen が生起しているという事実に関して、「複合グラウンディング」モデルではどのように説明できるであろうか。なんらかの条件を付加することによって説明可能となるが、現在のところ、評者には詳細は不明である。

3. 2. アスペクトについて

長谷川論文では、次のような、いわゆる「行為解説の進行形」が進行形の概念構造に基づいて興味深くアプローチされている。

(3) When one bows, one is conveying a message of respect toward the other person.

(長谷川 2005: 109)

この場合、二つの動詞 bow (=V₁) と convey (V₂) は「異なる動詞でありながら同一の行為を指している」(p. 119) という点が重要である。前者の行為を描く次元が D₁ であり、後者の行為を描く次元が D₂ である。前者は「具体的次元」であり、後者は「抽象的次元」であるとされている。すなわち、両者には次元の相違があるのである。

著者は、「今後の課題」として、以下の点を指摘している。

(4) …D₂として示した次元において、「行為解説」を中心としたこの進行形の語用論的機能にはどのようなものがあり、どのようにしてそれが働くのかを解明しなければならない。(p. 121)

この点は極めて重要な指摘であり、今後の研究がまだ待たれるが、評者は以下のように考
3. 3 モダリティについて

穂木論文では、モダリティと推理小説の関係というユニークなテーマが興味深く論じられている。『ロジャー・アクロイドの殺害』は、語り手自身が同時に犯人でもあるという理由で、「アンフェア」という議論を呼んだ作品である。この論文では、語り手が認識的モダリティを用いる場合、聞き手・読者に非協力的な態度を取っているという分析結果が示されている。

モダリティを用いるとは、その事柄を断言しないということでもある（澤田 2006: 143）。評者には、認識的モダリティが持つ「聞き手・読者への非協力性」の本質には、Grice (1975: 46, 1989: 27) の「協調の原則」の中の「質の公理」が大きな役割を果たしているように思われる。話し手（あるいは、語り手）が認識的モダリティを用いて発話して（あるいは語って）いる場合、「質の公理」によって、話し手（あるいは、語り手）はその命題内容について 100% 知っているわけではないという会話的推意 (conversational implicature) が働くからである。そのため、聞き手（あるいは、読み手）は、その命題内容を確かな情報として得ることができなくなったり、結果的にその発話（あるいは、文）は聞き手（あるいは、読み手）にとって「協力的」ではなくなると言えよう。

参考文献


Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation," In P. Cole and J. L. Morgan (eds.), Syntax and
Christopher Potts, *The Logic of Conventional Implicatures*


Reviewed by Eric McCREADY, Aoyama Gakuin University

This is an exciting book. In it, Christopher Potts draws on a brief discussion in Grice (1975), which yields a definition of *conventional implicatures* and criteria for deciding what counts as one. Armed with this definition, Potts shows how it can be given a clean formalization in a multidimensional logic. He then applies this logic to a range of interesting data, much of which is new. The book is not, of course, without flaws. But it is certainly worth reading for anyone interested in linguistic meaning.

In the first part of this review I will give a chapter-by-chapter summary of the book, focusing on the theory and on its applications. As we go through the summary, the ambition of this work will become apparent. I will then mention some problematic predictions of the theory the book details, and discuss what I take to be some of its implications. Finally, I will have a bit to say about why I find the project detailed in this book to be so interesting, and even inspirational.

Chapter 1 briefly introduces the book. The first result appears in chapter 2, 'A preliminary case for conventional implicatures.' In this chapter, the notion of a conventional implicature is introduced. What is a conventional implicature (CI) anyway? Potts's definition has four subparts, all derived from comments of Grice's. They are as follows: 1) CIs are part of the conventional meaning of words; 2) CIs are commitments and so introduce entailments; 3) these commitments are commitments of the speaker; and 4) CIs are 'logically and compositionally independent of 'what is said'" (p. 11: 2.10).